

館林キリスト教会 デボーションノート（2009年）

3月 1日 今日の通読箇所 箴言 22章1～16

「根気良く教えよ」

スザンナ・ウエスレーは、必要なことは何回でも、子供にわかるまで、また覚えるまで教えた。あまりの根気の良さにご主人が感心すると「それでもあと一回で覚えるというときにやめてしまつては、余りに惜しいですから」と答えたと言う。スザンナは有名な兄弟牧師、ジョンとチャールズ・ウエスレーの母親だ。ここにも「子をその道に従って教えよ。そうすれば年老いてもそれを離れることがない」[6節]とある通りだ。

3月 2日 今日の通読箇所 箴言 22章17～29

「信念の人」

世の中には慷慨家（こうがい）という性格の人がいて、いつも何かに悲憤慷慨している。正義感が強く、反権力的で理屈っぽくて感情的だ。不平家で、いくらかやきもち焼きのところもあり、そして言葉がどぎつい。付き合っているとついついつり込まれる。用心した方がいい。ここで「怒る者と交わるな。憤る人と共に行くな。わなに陥ることのないためである」[24,25節]と言うのはその意味もあるかも知れない。実生活の知恵だ。

3月 3日 今日の通読箇所 箴言 23章1～18

「悪魔のご馳走」

この章には「何々してはならない」「なぜならば何々だから」という教えが繰り返されているようだ。6節以下には、本当は勘定高いのに、親切らしくご馳走をする人が出てくる。うっかりその手に乗ると、結局は頂いたご馳走も、ていねいなお礼の言葉も吐き出す結果になる。その最大のものは悪魔だ。肉的な愛や快樂や成功や富などをいろいろ如才なく持って来るが、その真意は人に罪を犯させ滅びに陥れることに他ならない。

3月 4日 今日の通読箇所 箴言 23章19～35

「知恵の買い占め」

「真理を買え、これを売ってはならない。知恵と教訓と悟りをも買え」[23節]とある。「これらの貴重なものは時間、努力を費やしてせっせと買いなさい。もし怠慢や無益なことに時間を費やすなら、これらの貴重品を安く売り飛ばすことになるのだ」と。「折々は遊ぶ暇（いとま）のある人も暇なしとて、書（ふみ）

読まぬかな」と本居宣長も言っている。後半には遊女や酒に溺れる人が出てくるが、彼らはこれらのつまらぬ物のために大切な人生も魂も売り飛ばすのだ。

3月 5日 今日の通読箇所 箴言 24章1～12

「救いの責任」

「死地に引かれゆく者を助け出せ。滅びによろめきゆくものを救え」[11節]キリストの「親切なサマリヤ人」のお話のレビ人や祭司のように、死にそんな怪我人を介抱せず放置すれば「見殺し」などといって殺人に準じて非難される。もし最後の審判の時にあなたを指差して「あの人は私に救いについて教えてくれなかった」と言って滅びて行く人がいたら、あなたの気持ちはどんなだろうとある人は言っている。我々はいつも、伝道の責任を問われているのだ。

3月 6日 今日の通読箇所 箴言 24章24～34

「泥棒と強盗」

「箴言」には名文名言が多いが、あまり名言すぎて辛辣な場合もある。この章最後の「怠け者の描写」なども、辛辣でユーモラスで誠に名文だ。泥棒の用心は大切だが、警戒すべきは「怠慢」と言う泥棒だ。また、昔は大掛かりな強盗になると、軍兵を連れて襲ってくるので、ふせぎようもなくなただただ恐れられていたが、怠け者が自分の家を貧しくするのは、それ以上に恐ろしいと言う。家庭も教会も同じことだから、面白がったり、感心ばかりはしてられない。

3月 7日 今日の通読箇所 箴言 25章1～14

「黄金のりんご」

「おりにかなって語られる言葉は、銀の彫り物に金のりんごをはめたようだ」[11節]。言葉は美しく有益なものだ。我々の生活は会話、詩歌、文学など言葉によって豊かに美しく楽しくなる。慰めも、教育も、説教も言葉によることが多い。私たちも神様から言葉の賜物を頂き、TPOにぴったりした良い言葉で、神と人に奉仕して行きたいものだ。

3月 8日 今日の通読箇所 箴言 25章15～28

「忍耐と柔和」

「忍耐をもって説けば君も言葉をいれる。柔らかな舌は骨を砕く」[15節]は、忍耐と柔和をもって説得すれば、威張った王様でも頑固な硬骨漢でもだんだん心が砕かれて、彼の言葉を受け入れるようになるという意味だろう。反対に激しい言葉や鋭い議論はよし相手を凹ませることができても、かえって相手の心をますます堅くしてしまうものだ。我々も若いときは、説教口調や頭ごなしの

議論をまくし立てて、あまり人に好感を持たれなかったことを恥ずかしく思っている。

3月 9日 今日の通読箇所 エレミヤ書 1章1～10

「涙の預言者」

今日からエレミヤ記に入る。エレミヤの奉仕は50年に及ぶが、彼の奉仕がもっとも集中したのは、エルサレムがバビロン軍に滅ぼされ、国民が捕虜として連れ去られる、もっとも悲惨な時期だった。その血を吐くようなメッセージは民に受け入れられず、かえって売国奴と罵られた。その結果神の裁きを受けて母国が滅亡するのを、彼は目撃しなければならなかった。彼が「涙の預言者」と言われるのも故なしとしない。山室軍平氏は戦争中に「民衆の聖書」をエレミヤ記まで書いて亡くなった。この間似たような経験をした山室のエレミヤ記も、おのずから万感がこもっていて、涙なしには読めない。

3月10日 今日の通読箇所 エレミヤ書 1章11～19

「若き預言者」

エレミヤはまだ年が若く自信がないのに、預言者として神の召命を受けた。しかもその奉仕が困難を極めることも、すでに言い渡されたのだ。しかしまた「彼等(迫害者)は、あなたに勝つことはできない。わたしがあなたと共にいて、あなたを救うからである」との約束もいただいた。大鍋の煮え湯は危険なものだが、それが北からイスラエルに向かってぶちまけられる。この幻は、北方の強大国の侵入によって、イスラエルの罪の裁きが執行されるという意味だ。「わざわざ北から起こって、この地に住むすべての者に臨む」と、あなたは語れと、主は命じられる。

3月11日 今日の通読箇所 エレミヤ書 2章1～13

「水ため」

クリスチャンになった時の当初の感激は「若いときの純情、花嫁の時の愛」に似ている。しかし人心は移り易く、イスラエル人も次第に神を離れ「生ける水の源である神を捨てて、自分で自由に水ためを掘った」つまり神様以外のものに従い、そこに幸福と希望の源泉を見出そうとしたのだ。しかしこれは壊れた水ためで、人に空しさを与えるだけのものだ。そんなことは昔、十分経験し、よく分かっているはずなのだが。我々も「喉もと過ぎれば熱さを忘れる」ことのないよう注意したい。

3月12日 今日の通読箇所 エレミヤ書 2章14～25

「らくだとろば」

青年は「御しがたい若いらくだのように、危険な悪所の道を行き来する」女は「雌ろばのように欲情にあえぎ」その非行を押さえることができない[23,24節]。しかしこの言葉は若者のことでなく、押さえがたく偶像礼拝に走るイスラエルのありさまを嘆いた、エレミヤの言葉だ。その罪の結果、北からは獅子を旗印にしたアッシリア人が、南からはメンフィス、タバネスなどのエジプト人が襲ってきて、イスラエルを荒らすだろう[15,16節]。イザヤよりやや遅れて奉仕を始めたエレミヤも、イザヤと同じようなメッセージを繰り返し語らざるを得ない。悲しい事だった。

3月13日 今日の通読箇所 エレミヤ書 2章31～37

「絶望状態」

「あなたは『わたしには罪がない。彼の怒りは決してわたしに臨むことがない』と。あなたが『わたしは罪を犯さなかった』とすることによって、わたしはあなたを裁く[35節]」病気が直る見込みがない時に、苦痛を取り去って静かに死を迎えさせる場合がある。これは実は真の絶望状態なのだ。人が罪の自覚で苦しむのは、人を悔い改めと救いに導くための、聖霊の助け、聖霊の賜物だと言われる。ここに書かれているイスラエルの、しらじらしい、そらぞらしい態度は、彼等の救いがたい絶望状態を物語っている。我々はいつも励んで悔い改めねばならないのだ。

3月14日 今日の通読箇所 エレミヤ書 3章6～20

「滅亡の教訓」

エレミヤが奉仕した頃は、すでに北方イスラエルは神の裁きを受け、強国アッシリアの圧力のもとに滅亡してしまった。その事実を目撃しながら、南方のユダも、同じような罪を繰り返してやまないのである。イスラエルの罪の中心は靈的姦淫、即ち偶像礼拝であった。高い丘、聳える大木、それは彼等が偶像を祭るために好んだ場所だった。そこには石の偶像あり、木の偶像もあった。神はこの事態を悲しみ、すでにイスラエルに対しては、離縁状を送り彼を滅亡の手に渡したのだ。ユダはこの教訓を学ばない。日本人も、この教訓から学ばなければならないと思う。

3月15日 今日の通読箇所 エレミヤ書 4章19～28

「涙の説教」

「ああ、わがはらわたよ、わがはらわたよ。わたしは苦しみにもだえる。ラッ

パの声と、戦いの叫びを聞くからである[19節]」人々は神の勧めに耳を傾けず、裁きの戦火は近づく。彼等の滅亡の様を思って、エレミヤは悲しみ泣く。彼が「涙の預言者」といわれるゆえんだ。キリストも同じように、深夜エルサレムを眺めて泣いたと福音書に記してある。キリストもまた涙の救い主だったのだ。ライス博士も説教しながら涙を流した。あまり感情的だという人に対して「人々の滅びを思えば涙なしには話せない」と彼は答えた。

3月16日 今日に通読箇所 エレミヤ書 5章10～17

「薪と火と」

人々は預言者を嘲った。「(彼がいくら語っても)主は何事もなされない。災はわれわれに来ない。預言者らは、(内容のない)風となり、彼等のうちに(信ずべき)言葉はない」[12、13節]と。彼等は預言者の警告を無視し罪に耽った。ペテロも「終わりの時に嘲る者が自分の欲情のままに生活し『主の来臨の約束はどうなったのか。すべてのものは天地創造の初めからそのままであって変っていない』と言うであろう」(第2ペテロ、3章3,4節)しかし主は、確実にその裁きを行い「彼等の嘲りの言葉を火とし、彼等を薪として、彼等を焼き尽くす」と言われるのだ。

3月17日 今日に通読箇所 エレミヤ書 5章20～29

「太陽とマッチ」

新約に「常に喜べ絶えず祈れ、すべての事感謝せよ」とあるが、神に感謝するかしないかが、案外信者と不信者の分かれ目でもある。ここに「彼等は『我々に雨を与え、我々のために刈り入れの時を定められた、我々の神、主を恐れよう』とは言わない」[24節]とある。これが不信者の心なのだ。ある人が暗闇の道で下駄の鼻緒を切った。親切なクリスチャンのご婦人が、この人が鼻緒をすげかえるまで、そばでマッチを何本も擦って、手元を照らしてくれた。それをあまり丁寧に感謝されたのでご婦人は考えた。「この人は毎日世界を照らして下さる神様には、こんなに感謝しないのではないか」と。

3月18日 今日に通読箇所 エレミヤ書 6章6～15

「にせ医者」

ある人が、救いを求めて教会に来ました。しかしもともと酒好きな彼は、禁酒の決心がつきませんでした。ためしに別の教会に行ってみました。するとこの教会では酒を飲んでいてもかまわないということでした。そのうちに彼が病気になって手術を受けると、彼のお腹は、酒のため手の付けられない状態になっていました。間もなく彼は死にました。彼は酒からの救いを受けられなかった

のです。「彼等は手軽に民の傷を癒し、平安がないのに『平安、平安』という」
ところにあるが、罪と妥協して人をはっきり救いに導けない、ある種の教会の
責任は、重いと思う。

3月19日 今日に通読箇所 エレミヤ書 6章16～26

「大統領再選」

「あなたがたは別れ道に立って、よく見、良い道がどれかを尋ねて、その道に
歩み、そしてあなたがたの魂のために、安息を得よ」[16節]。我々は生活の中
でいつも別れ道、岐路に立つ。どの道を選ぶかという選択によって、生活も運
命も決まる。クリーブランド大統領は不良少年だったが、友達と遊びにゆくつ
もりで教会の前を通った。そこに「罪の払う値は死なり」と書いてあった。事
実彼の母親は、彼の行状を嘆いて自殺した。ふと彼は教会に入ろうと思った。
大喧嘩の末、彼は友達と別れて教会に入って救われた。彼の大統領再選のニュ
ースを、あの友達は死刑囚として聞いた、ということだ。

3月20日 今日に通読箇所 エレミヤ書 7章1～15

「無神経な礼拝」

当時のイスラエル人は不道德な行いを反省せず、一方では御利益を当てにし、
また交際のためなどと言って偶像礼拝をしていた。それでいながら、彼等はり
っぱなエルサレムの神殿を誇りにし、神殿の礼拝を好んだ。その偽善と、無神
経を神はたびたび警告されたのだ。「私の名をもってとなえられるこの家が、あ
なたがたの目には、盗賊の巣と見えるのか」これは神の嘆きだ。新約の時代にも、
キリストは同じような神殿の様子を見て、このみことばを引用して嘆かれ、
人々を警告なさったのだ。我々の教会は決してこうではないが、しかし常に反
省は必要だと思う。

3月21日 今日に通読箇所 エレミヤ書 7章27～34

「ほふりの谷」

イスラエル人は神に背いて、さまざまな罪を犯した。ここに我々にとって、最
も理解しがたい、偶像礼拝中の最悪事、人身御供のことがでてくる。彼等は、
エルサレムの東に横たわる深い谷に、トペテという偶像礼拝所を設け、子供た
ちを火に焼いてその神に捧げたい。神に対する献身、熱心、犠牲の気持ちを
現わすためなのだろうが、宗教も一端間違った方向にはずれると、ほとんど
狂気に近くなるらしい。やがてこの谷は「ほふり(殺し)の谷」と呼ばれるだろう、
とエレミヤは言う。裁きの日に、殺されたエルサレム市民の死体がこの谷に投
げ込まれるからだ。

3月22日 今日の通読箇所 エレミヤ書 8章4～13

「不正と偽り」

「彼等が小さい者から大きい者にいたるまで、みな不正の利をむさぼり、預言者から祭司にいたるまで（教育者から宗教家まで）偽りをを行っているからである。」どうもこの言葉はよそごとには聞かれない。それなのに彼等は反省せず「手軽に民の傷をいやし、平安がないのに『平安』『平安』と言っている」つまり「なに心配は要らない。俺たちは大丈夫だ」と言っている。しかし神様の裁きの日が来ると彼等は外国の乱暴な軍隊に踏みにじられるのだ。「それゆえわたしは彼等の妻を他人に与え、その畑を征服者に与える」葡萄の木にもいちじくの木にももう実はならず、その葉もしぼんでしまうのだ。

3月23日 今日の通読箇所 エレミヤ書 9章1～11

「涙の泉」

関根先生のお嬢さんに、障害のある子供が生まれた。そのことを知った母親が泣いたのを、先生は「人間にこんなに涙があるのか、と思うほど娘が泣いた」と話しておられた。いまエレミヤは「頭が水槽で、眼が涙の泉であったら」と嘆いている。ソ連解体後、ソ連南部で、ユーゴで内戦が続き、人々が殺されている。我々はそれをよそごとに聞いているが、エレミヤには、傲慢なイスラエルを裁くため、乱暴な外国の軍隊が押し寄せてくるのが、目に見えていた。それを思って常に「涙が涸れるほど」エレミヤは泣いたのだ。我々もまた日本が裁かれぬよう祈ろう。

3月24日 今日の通読箇所 エレミヤ書 9章17～24

「お葬式」

イスラエルは神の選民であり、エルサレムはその誇りであったが、BC587年、バビロン軍の総攻撃を受けて壊滅した。そんなことにならないように、多くの預言者が主から遣わされて、警告したが、彼等は頑として悔い改めなかった。エレミヤは、長く真剣なその奉仕にもかかわらず、悲惨なエルサレム滅亡を、目撃しなければならなかった。この時バビロン軍は、歴史的な残虐行為でエルサレムを荒らしたのだ。彼はそれを思って常に泣いた。今彼は依然ケロリとしている人々に勧める。「あなたがたはお葬式の時のように、大勢の泣き女を集めなさい。間もなくエルサレムのお葬式が始まるのだ」と。

3月25日 今日の通読箇所 エレミヤ書 10章1～16

「未開国日本」

「偶像は林から切り出した木で、木工が造る。金銀でりっぱに飾るが、倒れな

いように、釘とかなずちで台に打ち付けなければならない。勿論自分で歩くことはできないから、誰かに運んでもらわなければならない。物を言うこともできない。かかしと同じだ。それがどうして、人の祈りに答えられようか。人を助けることができようか。あるいは、人に災難を与える力があるだろうか」これは偶像に対する預言者の挑戦だ。世界に優秀な頭脳を誇る先進国日本にも、未だに偶像は多い。本当に不思議な話だ。そこ一種の宗教的、道徳的未開状態があるのが問題なのだ。

3月26日 今日に通読箇所 エレミヤ書 11章1～13

「約束違反」

昔、強国に捕らえられた奴隷として絶滅寸前だったエジプトから、イスラエル人は救い出された。彼等が感激して「以後は主に従って生きる」と約束したのは、極めて自然なことであった。またいかに人間が弱いと言っても、この気持ちも約束もまさか変わるまいと期待するのも当然だ。ところが彼等の気持ちも変わった。約束は破られた。これがいつもエレミヤが指摘してやまない神の悲しみなのだ。神様がその反逆の罪を裁く時はもう」祈っても泣いても、呼ばわっても間に合わない。つまり「今日神の声を聞いたならば、心をかたくなにしないで、従わなければならない」のだ。(ヘブル、4章7節)

3月27日 今日に通読箇所 エレミヤ書 11章18～23

「アナトテの民」

アナトテはもと祭司職レビ人の町だった。この地の人々はエレミヤの勧めに従わないだけでなく、かえってエレミヤを殺し、二度と説教ができないようにしようと企んだ。あるいは祭司には特にエレミヤの警告が耳に痛かったのかも知れない。しかしやがて神の裁きの器、バビロン軍がイスラエルを攻撃する時が来ると、この町はたまたまその大軍の通路に当たったので、彼等はまともに敵軍の血祭りにされ、恐るべき残虐行為の犠牲になったのだ。エレミヤはその全てを目撃することになる。

3月28日 今日に通読箇所 エレミヤ書 12章1～6

「単眼と複眼」

「悪人の道が栄え、不真実な者がみな繁栄するのはなにゆえですか」これは本当に昔からの古い疑問だ。中国に「天道是か非か」(いったい神のなさりかたは、正義なのか、そうではないのか)などという言葉がある。しかし問題は、単眼でなく両眼で、ものごとの両側面をよく見なければならない。また、近視眼でな

く、長い目ですべてのことを見つつ、最後の結論、最後の裁きを思わなければならない。「神のひきうすはゆっくり回るが、すべての物を碾(ひ)き砕くのだ」などと言われるわけだ。エレミヤも、それを学ばされている。

3月29日 今日に通読箇所 エレミヤ書 13章1～11
「貴重な帯」

エレミヤの預言の一つの特徴は、象徴的な行為をもって語ることだ。帯は、服装が単調だった昔の人にとって価値のある衣類だった。いまその高価で貴重な帯をユフラテの砂漠に放置した。少したって行って取り出して見ると、強い日光と、乾燥した空気にさらされて、もう使い物にならない。主は言われる。「帯をもって身を飾るように、主はイスラエルをもって、その栄光としようとした。しかし、彼等は、主の恵みを拒絶して日を経たので、もうぼろぼろで使い物にならなくなった。捨ててしまう以外に処置はない」と。彼はこの帯を示しつつ、説教したのだ。

3月30日 今日に通読箇所 エレミヤ書 13章12～19
「満杯の徳利」

ここではエレミヤが、酒の一杯入った徳利を幾つも出して、説教している。イスラエルの人たちが罪と偶像礼拝の酒に酔っているのを、警告するためだ。酒の満ちた徳利をぶちあてて、徳利はこわれる、酒は流れる、その様子を実演して見せたのだろう。そのようにやがて来る神の裁きの日には、彼等は外敵に攻撃されるだけではない。深刻な仲間割れ、国内対立が、国民の悲惨に拍車を掛けるのだ。それゆえ早く国民こぞって悔い改めるように、預言者たちは必死に、呼びかけるのだ。

3月31日 今日に通読箇所 エレミヤ書 14章1～9
「自業自得」

恐ろしい干魃で飲料水も出ない。収穫もない。家畜も牧草がないため死滅する。この飢餓状態は神の裁きによってもたらされるのだ。しかしエレミヤはその中にもなお神のあわれみを期待して祈る。「この悲しいありさまを、神様は一時的な通行人のように冷然と見ておられるのですか。また勇士と呼ばれ期待されながら、うろたえるだけで、この時、人を救うことのできない者のように、彼等を見殺しになさるのですか。これも彼等の自業自得ですが、でもどうぞ彼等をあわれんで下さい」と。